

## 主 題：御霊の賜物③

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 12章21-31節

このコリント教会の中には、悲しいことに自分などいてもいなくても誰も気にしない、自分は必要とされていないと考えるクリスチャンたちがいました。同時に私の働きは、ほかの人々の働きに比べて重要なのだ、大切なのだと考える者たちもいたのです。ですからある人たちは大変な優越感を持っているし、ある人々は大変な絶望感を持っている。そのような人たちが教会の中に集まっていたのです。

この問題はコリント教会だけではなく、どの教会でも起こり得ることです。私たちは神の前に必要だけれども、あなたはそうではないと言うことは正しいのかどうかです。そういったことがもし教会の中で許されるとしたら、教会の中に分裂が生じるのは言うまでもありません。ある人はみずからを高ぶって、非常に高慢になって人々を見下すようなことがなされているのです。このコリント教会の問題の一つは賜物の種類だけではなくて、持っている賜物の数などによっても霊性を判断していたことです。どんな賜物を持っているのか、どれだけ持っているのかによって、私はあなたよりも霊的だ、優れていると思っていたのです。自分は重要だが、あの人はそうではないと見下すことの危険さというのは皆さんも重々ご承知のことだと思います。

## ☆すべての器官の重要性

私たちはパウロが与えてくれるみことばを通して、与えられた賜物の中に重要な賜物とそうでない賜物が実際存在するのかどうか、神がお与えになられた賜物の中に不必要だと言える賜物が存在するのかどうか——。もっと言えば賜物を与えられている私たちキリスト者の中に必要な人と必要でない人が存在するのかどうか——。あなたなどいなくていいよ、果たしてそんなことが神の教えなのかどうかです。パウロは大切な神の真理を教えてくれるのです。パウロは、人々のそのような偏見に対して神がどのように教えているのかを21-30節までに記しています。結論から言うところのことです。すべての器官、すべてのからだのパーツは重要なのだということです。パウロはそのことを繰り返し教えてくれるのです。

## 1. 「すべての器官が必要」 21-22節

まず21-22節を見ると、我々も既に見てきたように、彼はすべての器官が必要だと教えます。パウロはイエス・キリストを信じる者たちを「キリストのからだ」と表現して、いかにそこに分裂があってはならないのか、それが一つである重要性を教えてきたのです。

## 1) 「私たちの偏見」：「からだの中で比較的弱いと見られる器官」

21節に「そこで、目が手に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うことはできないし、頭が足に向かって、『私はあなたを必要としない。』と言うこともできません。」とあります。擬人法的で実際に起こり得ない話ですが、もし「目が手に向かって」、「頭が足に向かって」、「あなたを必要としない」と言うことができるかという、それはできないと教えます。なぜかという必要だからです。22節も「それどころか、からだの中で比較的弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。」と続きます。パウロは必要なだけではない、各器官がすべて重要だと言うのです。残念ながら人間の持つ偏見というのは、同じように見ないのです。周りの人を見てあの人は非常にすばらしい働きをしているから大切であって、そんな働きをしていない自分はそうではないと。

ここに「からだの中で比較的弱いと見られる器官」と出ていますが、確かにこの「弱い」ということばは「弱さ」や「貧弱である」、「弱々しい」という意味があります。でもこのことばは、これらの器官が全く重要でないことを強調しようとしていると言うのです。だから今私たちが見てきたように、からだの中でもこのパーツは余り重要ではない。確かにどうして神様がその器官を私たちのうちに置かれたのかわからないこともあります。それで私たちはこれは重要だけれども、これはどっちでもいいのかなと考えるのです。問題なのは、教会の中で人々が人々をそんなふうに見ていたということです。このような器官が、つまりこのような信仰者が実際のところ余り重要ではないよということを強調していると言うのです、この「比較的弱い」ということばが。

しかし、これはあくまで「見られる」と書かれています。そのように思われるということです。これは神が言っておられるのではない。人々がそう思っているだけの話です。勝手にそのような偏見を抱いているのです。

## 2) 「神の真理」：「なくてはならないものです」

では、そういう過ちに対して神が何とっておられるかという、「かえってなくてはならないものなのです」と22節に出てきます。これは必要欠くべからざる、不可欠だということです。私たちがわかってわかるまいと、神様が言われていることはすべての器官は必要だ、言い方をかえれば救いにあずかったすべての信仰者は必要だということです。ですからまずそのことを我々は認めることが必要です。私たちの指もそれぞれ役割が違います。物をつかむためには親指が絶対必要なのです。なぜならほかの指と親指は向いている方向が違います。だから親指抜きで物をつかもうとしたら大変難しいです。人差し指と中指は物をつまむために必要です。薬指と小指はそこに力を入れてしっかり握るために必要です。5本もあるのだから1本なくなっても構わない、誰もそんなことは思いません。我々自身がよくわかっていないけれども、ちゃんとそれぞれ必要なものとして神がここに置いてくださった。薬指などは一生懸命動かそうとしたらほかの指まで一緒に動いてくるのでこの指なんてと思いますが、私たちがわからないだけで、神はちゃんと目的を持ってこの5本の指を置かれたのです。そのことをパウロは教えようとするのです。群れの中で誰が必要で誰が必要でないなどと、なぜあなたは言うことができるのだと。またあなたは どうしてそんな思いを持って歩んでいるのかと。

## 2. 「すべての器官を尊ぶ」：互いに尊ぶ 23-24節

23-24節でまたからだの器官の話をするのですが、「また、私たちは、からだの中で比較的尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになります。かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」とあります。

### 1) 「私たちの偏見」 23節

まず先ほど見てきたように、「からだの中で比較的弱い」と私たちが勝手に思う器官の話が21-22節に出てきたのですが、23節にはまた私たち人間の偏見が出てきます。「からだの中で比較的尊くないとみなす」と。この「尊くない」というのは「軽蔑する」ということです。ここにあるように「尊くない」とか「見ばえのしない」、「劣った」というのは別の器官ではなくて、恐らく同じ器官の話をしているのだと思います。ですからまず「比較的尊くない」というのは「軽蔑される」という意味があります。次に、「見ばえのしない」というのは「恥ずかしい」とか「かっこうの悪い」、「いやらしい」という意味のことばです。

#### ・私たちの対応：

ではどの器官の話をしているのかと言うと、これで行われているのは陰部のことです。私たちが隠す部分です。そういう隠そうとする部分に関して、我々は恥ずかしいとかいやらしいと思ってしまいますが、我々がどんなふうに対応しているかと言うと、23節「比較的尊くない」と思う器官を「ことさらに尊ぶ」とパウロは書いています。これはそこに「衣服を着せる」、「洋服をまとわせる」ということです。私たちは恥ずかしいと感じる器官に洋服を着せると言っているのです。

アダムとエバが造られて彼らが罪を犯した時に、彼らがしたことの中の一つが聖書の中に記されているのを思い出してください。創世記3：7に「ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」とあります。そうして自分たちの陰部をちゃんと覆ったのです。ですから「比較的尊くない」ところを「ことさらに尊ぶ」、その部分に衣服を着せると、「見ばえのしない」と思う器官は「ことさらに良いかっこうになる。それはその外部の美しさとか、容姿が美しくなるということです。またある辞書によれば、「たしなみ」とか「礼儀を持って取り扱う」という意味のあることばなので、私たちはそれらを特別な慎み深さを持って扱うということになります。つまり、恥ずかしいからといって放っているのではない。ちゃんとそこを衣服で美しく覆っているという話です。あのエデンの園で彼らはいちじくの葉で腰を覆ったとありました。彼らを追い出される時には神は皮の衣を着せられたと(創3：21)。ですからこの23節からパウロが言うことは、たとえそのような器官であっても我々はそれを放っておかないで、美しい衣服でちゃんと覆っているではないか、こんな部分は要らないと言っていないと言うのです。

### 2) 神の真理 24節

24節に「かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」とあります。「かっこうの良い器官にはその必要がない、私たちは顔を覆いで覆ったり、衣服で覆ったり、例えば筋肉質のその腕を覆って隠したりしない」とい話なのです。

#### (1) 「しかし神は、劣ったところを」

「しかし神は、劣ったところ」、これは神がそう言っているのではなく我々がそう思っているのですが、劣っていると、足りないと思っている。そういうところであったとしても、神様はどんなふうに取り扱われるかという、「ことさらに尊んで」と、我々自身も大切に扱うように神は美しく飾り、大切に扱

ってくださいという話です。なぜこんなことをパウロが教えたかという、我々がどんなふうに思おうとも、そのからだのすべての器官は神によって造られたゆえに、すべての器官が重要なのだ、必要なのだ。そしてあなたも私もその器官に対してもちゃんとケアをしていると。神はそれ以上に扱ってくださいのだと教えます。

## (2) 「からだをこのように調和させてくださった」 ヘブル4：2

そして「からだをこのように調和させてくださった」と。これは「混ぜ合わす」、「結び合わす」、「結合する」という意味です。新約聖書の中にはこの箇所以外にもう1カ所しか出てきません。ヘブル4：2には「結びつけられなかった」とあり、「結びつける」という意味で用いられています。重要だと思わない器官や恥ずかしいと思うところに対して人間は偏見を持っていて、すべての器官を同じように見ていない。そこでパウロは、でも神がその器官をお造りになり、一つのからだにされたのだと教えるのです。我々のからだのすべてのパーツは必要なのです。一つのからだであるゆえに、からだが一致して協力して、主の目的を果たすことが必要だとパウロは言っているのです。

## 3. 「一つのからだ」：分裂がなく いたわり合う 25-27節

もしそのことをしっかりと理解していないと、最初にもお話ししたように教会の中にいろいろな分裂が出てくるのです。私は重要だけれども、あなたはそうではない、私は必要とされていないと。そういった誤った考えを持ってしまうのは、このことがちゃんとわかっていないからです。我々は一つのからだとされたのだから、分裂するのではなくていたわり合うことが必要だというのが、この25-27節でパウロが教えることです。

### 1) 「いたわり合う」 25節

25節「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うため」だった。

#### (1) あってはならないこと：「それは、からだの中に分裂がなく」

からだの中に分裂や紛争があってはいけないと言っているのです。

#### (2) あるべきこと：かえって「各部分が互いにいたわり合うためです」 ピリピ2：3

あるべきことは、かえって「各部分が互いにいたわり合う」ことだと。そのからだの器官すべてがいたわり合っていくと。この「いたわり合う」というのは、「何かのために心を用いる」という意味です。

「気にかける」とか「起こり得る危険や災難を懸念して」ということです。

私たちはそれぞれ異なった役割を持っているゆえに、どっちが重要なのかを評価するとか、非難し合うのではなくて、お互いの必要に対して関心を払って、助け合っていくと。お互いに尊び合うことが必要だと。みことばの中で我々が教えられていることは、もしすべての人たちが自己中心とか虚栄からすることになったら、そこには問題しか起こってきません。だから「へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」(ピリピ2：3)と教えられています。高慢やプライドというのが大変危険だという話です。だからそのからだの中であって、つまりその教会の中であって分裂を起こすのではなくて、お互いがお互いの必要に対して関心を払って助け合っていくことだと。

何度か我々が見てきたように、すべての中心が自分だったら必ずそこに問題が出てきます。なぜ私のためにだれも何もしてくれないのかと、なぜこんなに私は困っているのに何もしてくれないのかと。一番いい解決方法は、すぐに人のために何かすればいいのです。我々の問題はすべての中心に自分がいることです。愛する自分が自分が望むように扱われていないと不満を感じるのです。みことばが私たちに言うのは、互いに「いたわり合う」のです。私が行って誰かに助けの手を差し伸べるのです。そうしてお互いに尊び合いなさいと。

### 2) 「ともに苦しみ、ともに喜ぶ」 26節 ローマ12：15

26節には互いに苦しみ、互いに喜ぶことが書かれています。「もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶ」と。ローマ12：15にも「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。」とあります。

#### (1) とともに苦しむ

パウロはここで言うのです。「もし一つの部分が苦しめば」、この苦しみというのは「苦痛」や「不快なこと」です。そういうことを経験したらともに痛みを感じなさいと言うのです。大切はことは、そこに行って説教しなさいとは書いていませんよね。確かに正論であったとしても、私たちがすぐにしてしまうのは説教です。そんな失敗、ありませんか？自分がされる立場に立ったとしたら、時にはことばなど必要としないのです。誰かが一緒にいて、そこで泣いてくれたらそれで済むのです。私たちにとって必要なことはその苦しみをともに苦しむことだと。

#### (2) とともに喜ぶ

またともに喜ぶ者でありなさい。「もし一つの部分が尊ばれば(褒められたならば)すべての部分がともに喜ぶ」のだと。こうしていたわり合っていくなさいと。なぜならからだはそうやっているのです。

皆さんもご存じかと思えますけれども、人間のからだというのは非常に不思議で、テレビで紹介されていたので私も少し調べてみましたが、人間は痛みを感じた時にその箇所を手を当てることを無意識のうちにしてしまう。なぜそういうことをするかというと、痛いところに手を当てることによって、脳はその痛みよりもその手が触れている触覚を優先するから、痛みが和らぐのだと。不思議なことで私たちは自然にそう反応してきました。からだは見事に調和しています。痛いところがあったら、そうやって補ってくれる。その結果痛みが軽減すると。無意識のうちに私たちはそんなことをしているのです。

まさにパウロが教えてくれているように、からだはそうやって調和がとれているのです。我々は親指はこうやって使うのだとか、小指はこう使うのだとか、痛い時にこうしたらいい、ああしたらいいと教えられたわけではないのです。我々のからだはそうやって調和を保っているのです。それをもってパウロが教会も同じだと言うのです。どのパーツが重大でどのパーツがそうではないとか、それは主のみこころではない。私たちが一つに集まる時に必要なことはともに苦しみ、ともに喜ぶことだと。

### 3) 「キリストのからだ」 27節

なぜそんなことをパウロが教えるのか——。27節「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」と、ここに理由があります。私たちが一つになるということがいかに重要であるかと。我々はキリストのからだであって、ひとりひとはその器官なのだ。

私たちが覚えなければいけないのは、人間のからだのすべての器官が神様によって備えられたということです。ほとんどの人は心臓が同じようなところにあるのです。内臓も同じように整っているのです。ちゃんと神がそこにそういうものを添えられた。からだにはさまざまな器官が存在しています。言い方をかえれば、一つのからだを形成するためにはそこに存在するすべての器官が必要だということです。だから必要でない器官など存在していないのです。我々はまだその存在を、その理由を知らないことが確かにあるでしょう。でもそれは我々がわかっていないだけなのです。お造りになった神様はちゃんとすべてのことをわかった上で、最善をなされたのです。私たちのからだの中に必要でない器官はない。そこは皆さん、確かにそうだ、アーメンと言えます？だとしたら、私は手ではないから、私は足ではないから必要ではないという、そういう思いを持ってはならないということはおわかりだと思います。神は失敗をなさる方ではないし、神はからだの中にB級のものを入れられたのではないのです。A級のもの、一級品ばかりです。神のお造りになったものはそういうものです。あなたはそういう存在だと言うのです。だから人の働きを見て、Aさんのような働きができないから、Bさんのようなことができているから、こんな働きしかできない私は役に立たない。そんな偽りにだまされてはいけないということです。神が言っておられるのは我々が今見てきたとおりです。神様はあなたを選んでくださり、そして置くべきところにちゃんと置いてくださったのです。あなたを特別な器官とされたのは神ご自身だということです。

このことをしっかり覚えてください。ここにおられるイエス・キリストを信じておられるすべての皆さん、あなたは教会の成長のために必要なのです。そのために重要だということです。なぜなら1コリント12:7には「みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられている」と見てきました。あなたに賜物が与えられたのはあなたのためではない、周りの人々の益となるためだと。人々が成長するためにあなたは必要だと言うのです。だから私たちが心がけなければならないのは、ガラテヤ5:25-26に「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。互いにいどみ合ったり、」、つまり競い合うのです。確かにどっちが偉いとか偉くないとか、そんなことをしているのではなくて、「そねみ合ったり(互いにねたみ合うこと)して、虚栄に走ることをないようにしましょう。」と。「虚栄に走る」というのは、実質以上に見せかけて地位とか身分などをそれぞれが誇り合っていることです。自分は偉いのだと、自分は必要なのだとか、自分は重要なのだとか、そんなことするために我々は救いにあずかり、神様によって置かれたのではないと。私たちは人が自分をどう見るかではなくて、神様が言われたことをしっかりと果たしていくことです。みんなそれぞれひとりひとりに、すばらしい賜物が与えられている。あなたはキリストのからだのどこかのパーツ、どこかの器官なのです。そのことを感謝して神の助けをいただきながら与えられた務めをしっかりと果たしていくことです。

### 4. 「神からの賜物」：神のみわざ——神による任命 28節

ここまで話したパウロはこの後28節から神によって任命された働きのリストを挙げています。「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。」とあります。「任命」というのは「みずからの用に立てる」という意味です。神様はご自分の御用のためにこういう人々をお立てになったということです。ではどんな人かということ、「第一に使徒、次に預言者、次に教師」とあります。今私は新改訳第二版で読みましたけれども、新改訳2017年版は「第一」と書かれた後に「次」というのを「第二」、そして「第三」と訳しています。一番、二番、三番と書いてあるのです。一番は「使徒」であつ

て二番は「預言者」、三番が「教師」とあります。原語から言えば確かにそうなのです。そしてこの一番、二番、三番というのは重要さの順序ではないということです。これは教会史上の歴史的順序です。神はどうやって教会を建てて行かれたのか、その順序を言っているのです。

### 1) 「使徒」

最初に「使徒」たちがいたということです。確かにイエス様とともに十二の使徒たちがいたのです。マルコ3：14にもイエス様は「十二弟子を任命された。」とあります。その中の一人イスカリオテのユダがイエス様を裏切ることによって、新たにマツテヤが加えられて十二使徒がいたのです。彼らはイエス・キリストの復活の目撃者であり、教会の土台を築くために神様によって立てられた者たちです。でも「使徒」と言った時に12名だけだったかということ、実はそうではありません。他にも「使徒」がいたのです。例えばバルナバという人物も「使徒」でした。使徒14：4が教えます。シラスやテモテもIテサロニケ2：6です。そしてパウロ自身もそうだったことは皆さんもご存じです。またそれ以外にも存在したことがローマ16章やIIコリント8章、ピリピ2章にも記されています。確かにこの12名に関しては、イエス・キリストの「使徒」と呼ばれています。パウロもその中に自分を入れています。それ以外の者たちは「教会の使者」と記されています。例えばIIコリント8：23に「兄弟たちについて言えば、彼らは諸教会の使者、キリストの栄光です。」と。教会がペンテコステで誕生した後、神がどのように教会をお造りになったかということ、まず最初にこの「使徒」たちをお立てになって、彼らを用いて教会を建てていかれた。しかし、この「使徒」という働き人の話が使徒16：4以降に出てきません。恐らくこの人々が死を迎えたことによってこの職務も終了した。だから今現在を使徒職を持った人は存在しません。そのように教えるところもあります。でもみことばを見る限り、「使徒」という特別な職務をいただいた者たちは存在していないのです。

### 2) 「預言者」

次に出てきたのは「預言者」です。既に見たように「預言者」というのは神様にかわってそのみこころをこの世に語る者たちです。だから未来のことを語るというよりも、神が語れというメッセージを人々に伝えた者たちです。

今この「使徒」と「預言者」の二つを見ましたが、この人たちの特徴は、賜物として教会に送られた働き人です。なぜなら「使徒」という賜物は存在しないからです。「預言者」という賜物も存在しないのです。神様によって「使徒」や「預言者」という働き人が教会にギフトとして、賜物として与えられたのです。そしてこの「使徒」とか「預言者」という働き人は、みことばの完成とともにいなくなっています。なぜなら神様からの新たな啓示がないからです。聖書が完成するまで、神様からの啓示を人々に伝えたのです。みことばが完成するということは何を意味するかということ、神の啓示が終わったということです。神が人間に伝えようとするメッセージはすべて語られたわけで、それがすべて記されているのが聖書です。これまでと言われた以上、キリストの啓示を伝えるという働きは必要なくなった。

この「使徒」と「預言者」には教会の土台を築くという大きな責任がありました。今お話ししたように神様の啓示を人々に伝えるという大きな責任がありました。同時に使徒の働きを読むとよくわかるようにさまざまな奇蹟を行った。なぜ神様が彼らを通してあえて奇蹟をなされたかということ、それを通して彼らの語っているメッセージの信憑性を明らかにしたのです。確かにこのメッセージは神からのものだ。教会の土台を据えることによってその働きが終わるのです。

### 3) 「教師」 エペソ4：11

そして、第三番目に出てくるのが「教師」です。新改訳第二版は「次に教師」と書いています。神は第三番目に「教師」をお与えになったと。「教師」というのは、見てすぐにわかるように明らかに教える人であるということです。ただここで言われている「教師」というのは教える賜物を持っているだけではなくて、神様によって特別に召された「教師」たちの話です。教会の教化のためにたぐいまれな「教師」としての働きに召された人々です。だから教える賜物を持っている人はたくさんいます。でもこの人たちはその中でも特別に、例えば聖書の深いところを理解することができたり、一日中みことばの学びに費やして、神様の真理をくみ取っていくような人たちです。そういう人々によって書かれたさまざまな註解書は多くの教師たちや牧師たち、また多くの信仰者たちの助けになるのです。ですからここで言われている「教師」というのは、ただ教える賜物を持っている人たちのことを言っているというよりも、特別に神様によって召された人々の話です。

今私たちは三つの、特に働き人を見ました。「使徒」がいて「預言者」がいて「教師」が三番目にいると。パウロはエペソ4：11に二つ別のリストを加えています。「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。」と。つまり「使徒」と「預言者」によって始まった教会の土台を築いていくという働きはこういった人々によ

て継承されているということです。ですからこういうリストの中でも、もう既にその働きを終えてしまった人々もいるし、現在も働きを継続している人々もいます。

28節の「教師」の後、「それから」と書かれたその後、さまざまな賜物について教えます。28節には恒久的な賜物と一時的な賜物のリストが並んでいます。つまり今も継続されている賜物ともう既に終わってしまった賜物があるのです。働き人にもそうであったように賜物の中にも今も与えられ続けている賜物ともう既になくなった賜物とが存在します。

#### ・ 霊的賜物に関して

そのリストを見ていく前に、この霊的賜物に関して次の三つのことをぜひ覚えてください。

#### ① 賜物として与えられた人

一つは教会に賜物として与えられた人がいるということです。牧師というのはそうやって教会に与えられた者たちです。

#### ② 継続する教化の賜物

二つ目に継続する教化の賜物。教会の中にあって、ひとりひとりが成長するために今も与えられ続ける賜物が存在すると。

#### ③ 一時的なしるしの伴う賜物

一時的なしるしの伴う賜物です。いろいろな奇蹟や目に見えるわざが伴うような一時的で、今はなくなってしまっている賜物も存在するということです。

先ほどお話しした新改訳2017年版の28節には「第一に」「第二に」「第三に」と書かれています。それだけではなく28節は「神は教会の中に、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして力あるわざ、そして癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言を備えてくださいました。」と書かれています。あえてこれをお読みしたのは、実はこの訳の方が原語に近いのです。新改訳第二版では「それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者」となっていて、同じように人を意味します。ですからこういう働き人が教会にギフトとして与えられ、そしてその後もこういう賜物を持つ人々があたかも与えられたかのように見えます。でもここで言っているのは人の話ではなく賜物の話なのです。第二版では「者」ということばをあえて補っているのですが、2017はそれを除いてより忠実に訳しています。「力あるわざ」であって「癒やしの賜物」、「援助」、「管理」、「種々の異言を備えてくださ」ったと。人だとは書いていないのです。ここで言っているのはあくまで人ではなくて、まさに賜物の話なのです。

#### ◎ 五つの賜物

ではどんな賜物があるかという、五つ出てきます。

#### ① 「奇蹟を行う【力あるわざ】」

既に見てきたように、大変奇蹟的なことを行った。教会が誕生する時には実際にそのようなことが行われていました。

#### ② 「いやしの賜物」

これもそうでした。パウロの手ぬぐいに触れるだけで癒されるというようなことがなされました。

こういった賜物は今存在していません。神は奇蹟を行うことができます。神はいやしを行うこともできます。でもこういう賜物が今特別な人に与えられているかという、そういったことは現在なされていません。そういう人がいたらいいなと思います。なぜかという、今ほど困っている人がたくさんいる時代というのはそうないからです。でも悲しいことに今そういう賜物は与えられていない。

#### ③ 「助ける」

三つ目は「助ける」、「援助」ということばです。どういう意味かという、人に知られないように援助する。もちろんこれは物質的とか肉体的だけではなくて霊的な必要にもこたえていくということです。バークレーはこんなふうに説明しています。「貧困者や孤児ややもめ、また訪問客を助け、援助する」と。いろいろな必要を抱えた人々に対して、その必要にこたえていこうとすると。こういう賜物が与えられている人々は確かにたくさんおられる。こういう賜物は現在も存在します。

#### ④ 「治める」

次に「治める」（第二版）という賜物は「管理」（2017）とも訳されています。これは導く能力やリーダーシップのことです。もっと言えばこのことばは「舵を取る」という意味です。「治める」や「管理」ということばの同語源のことばが使徒27：11に出てきます。そこには「パウロのことばよりも、航海士や船長のほうを信用した。」とあります。パウロが乗っている船が嵐に遭った時の話で、ここで使われている「治める」や「管理」ということばは「航海士」という意味があります。辞書には「操舵士」とか「航海士」という意味があると出ています。どんな働きをするかという、文字通り岩礁や浅瀬を縫って船を安全に港へと導いていく仕事です。だからこの賜物をいただいた人たちは正しく教会を

導いていくという、教会の中においてのリーダーシップを持つ人たちです。牧師や長老たちに特に必要な賜物です。

マッカーサー先生はそのリーダーシップに関して、「リーダーシップとは目的を確認し、それを形式化し、人々のグループを動員してその目的を達成する能力だ」と言います。またこうも言います。「キリストは牧師にここに目標があり、ここに人々がいる。今彼らを動員し、そこに彼らを移動させなさい、それがリーダーシップだ」と。動機づけをしてその目標に向かって人々を導いていく賜物です。

### ⑤「異言を語る」

最後に出てくるのは「異言を語る」という「異言」の話です。先ほどから見ている2017年版には「種々の異言」と書いてあります。つまり「さまざまな種類の」ということです。ですからいろいろな種類のことばがあったということです。このことはまた14章で見えていきます。

### 5. 「ひとりひとは各器官」 29-30節

そして29-30節でパウロはこんなことを言います。「みなが使徒でしょうか。みなが預言者でしょうか。みなが教師でしょうか。みなが奇蹟を行なう者でしょうか。みながいやしの賜物を持っているでしょうか。みなが異言を語るでしょうか。みなが解き明かしをするでしょうか。」と。みんな同じ器官だったら、からだとしては成立しないでしょう。みんなが使徒でしょうか？違います。みんなが預言者でしょうか？違います。みんなが教師でしょうか？違う。みんなが奇蹟を行うか？違う。みんながいやしの賜物を持っているか？違う。みんなが異言を語るか？違う。みんなが解き明かしをするか？違う。パウロは、こうして修辭疑問を用いながらあなたは特別に造られたのだと教えます。確かにからだは一つでも、あなたはそのからだの各器官であり、主があなたには特別な賜物を与えてくださっている。だからすべての人が必要だと言っているのです。

### 6. 賜物よりも大切なもの 31節

最後にこう締めくくります。31節「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」と。何かに対して熱心であるとか、何かを一生懸命得ようと努めるということです。

そうすると、読み方によっては、よりすぐれた賜物を熱心に求めたら、それが与えられるのではないか——。例えば自分は手だけれども、また別の賜物が欲しいから、こっちの方がすばらしいと思うから、一生懸命熱心に願ったらそれを神様は下さるのか——。そんなことを言っているのではないですよ。神様はあなたを特別に選んであなたに特別な賜物を下さった。我々は比較し合うのではないのです。与えられた賜物に心から満足して感謝し、そしてすべての人たちの益のために主に仕えるのです。

パウロが教えたいのは、確かにすばらしい賜物があなたに与えられている。その賜物を用いて兄弟姉妹の成長のために仕えることが必要だ。そしてたとえあなたがそれをしたとしても、大切なのは動機だと言っているのです。14:1を見てください。「愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」とあります。本当はこの12章の終わりのところから14章につながるのです。13章がこの間に挿入されているのです。ですからパウロは、このコリントのクリスチャンたちにあなたに与えられた賜物をしっかり用いて兄弟姉妹たちの成長のために仕えていきなさい。同時にあなたたちがその働きをするに当たって愛という動機が最も大切だ。だからさらにそれに勝る道を示してあげようと。愛を持ってしなければ、どんなに立派な働きであったとしても、喜ばせたいと思っている神を喜ばせることにならない。そのことについて特に彼はこの後教えていくのです。

我々はみんな違う賜物をいただいていることを見てきたのです。神様は周りの信仰者の成長のためにあなたを用いてくださると。しかもそれは教会全体が成長するために神様は特別な賜物をあなたに下さったと。だから、あの人は重要だけれども、私は必要ではないなどとそんなうそに惑わされてはいけません。神は特別にあなたを愛して、あなたを選んで特別な賜物を下さった。その賜物を用いて仕えることです。そして、熱心に働くことはすばらしい。問題は正しい動機をもってその働きをしているかどうか、主への愛がすべての動機となっているかどうかです。やらなければいけないからやるのか、それともやりたいからやるのか、神を愛するから行うのかどうか、その動機を忘れてはいけないとパウロは教え、その愛についてこれから教えていこうとするのです。

きょうのみことばを見て、願わくばひとりひとりの皆さんが神は私を使ってくださるというその確信を新たにしてくださることを心から願います。そして、その約束を信じて仕えることです。その時にあなたはただ聞いていたこと、誰かから教えられたこと、きょう学んだこと、この神が言われたことが本当にそうなんだという確信に到達します。その時にあなた自身の信仰が変えられていくのです。どうか主のみことばを実践する者としてこの一週間を歩んでください。